

春秋左氏経伝の齟齬について

近 藤 則 之

はじめに

筆者は先に劉歆が秘書中に『古文春秋左氏伝』を発見したことを記した『漢書』劉歆伝の班固の記事は、後漢に起こった誤説に基づくもので、劉歆がそこに発見したとするものは、『古文春秋左氏伝』ではなく、『古文春秋経』であつたことを、同伝の歆自身がこの問題に言及している「移太常書」の再解釈を通じて論じた^①。そしてその傍証の一つとして、現在の『左氏伝』の経が、『左氏伝』が伝を為すに当たつて見た経を承けるのではなく、これこそ劉歆が発見したとする『古文春秋経』を伝承するものである蓋然性が高いことを述べた。その際、現行『左氏経』が『左氏伝』の作者が見たものを承けていないことを指摘するに当たつて、主に紙幅の制限の為に、『左氏伝』引用の経文と現行経文との間の齟齬を列挙することのみ行い、その齟齬をもつて両者の相異と断定するまでになさるべき諸条件の吟味の作業については、ほとんどこれを省いてしまった。

そこで、本稿において、前稿の不備を補うべく、『左氏伝』の所引の経文と現行経文との間の齟齬を改めて吟味し、現行経文が『左氏伝』本来の経を承けるものではないことの詳細な論証を試みたい。

一、『左氏伝』の経文引用の概要

『春秋』の経文と、それに何らかの形で触れた『左氏伝』の文との両者を比較してみると、常に経文の記載が伝文にそのまま引用されているわけではない。両者には、しばしば何らかの相異なるいは齟齬が見出される。しかし、その相異なるいし齟齬によつて、直ちに今日の『左氏経』の祖と『左氏伝』が用いた経が違ふものであるとする小論の結論を導くわけにはいかない。それが『左氏伝』による経文に対する何らかの敷衍ないし説明、あるいは省略によるものである場合がしばしばあるからである。

ここで、まず隠公元年から三年辺りまでの経文とそれに応ずる『左氏伝』の記述を次の表によつて対照し、経文各条に應ずる『左氏伝』の記述上の一般的傾向を見、いかなるものを経伝齟齬の例とするかの前提条件を確認しておきたいと思う。

隠公元年		経文		伝文	
1	春、王正月			春、周王正月	
2	三月、公及邾儀父盟于蔑			同経	
3	夏、五月、鄭伯克段于鄆			同経	

4	秋、七月、天王使宰嚭來歸惠公仲子之贈	同経
5	九月、及宋人盟于宿	同経
6	冬、十有二月、祭伯來	同経
7	公子益師卒	衆父卒
隠公二年 経文		伝 文
8	春、公會戎于潛	同経
9	夏、五月、莒人入向	夏、莒人入向
10	無駭帥師入極	司空無駭入極
11	秋、八月庚辰、公及戎盟于唐	秋、盟于唐
12	九月、紀裂繻來逆女	同経
13	冬十月、伯姬歸于紀	無記事
14	紀子帛莒子盟于密	冬、(以下同経)
15	十有二月、乙卯、夫人子氏薨	無記事
16	鄭人伐衛	同経
隠公三年 経文		伝 文
17	春、王二月、己巳、日有食之	無記事
18	三月、庚戌、天王崩	三月壬戌平王崩
19	夏、四月、辛卯、君氏卒	夏、君氏卒
20	秋、武氏子來求賻	同経
21	八月、庚辰、宋公和卒	八月庚辰、宋穆公卒
22	冬、十有二月、齊侯鄭伯盟于石門	冬、齊鄭盟于石門
23	癸未、葬宋穆公	無記事

このように、経の本文とそれに応ずる『左氏伝』の記載は、直接的な一致を見ない場合が極めて多い。また、経の記載に『左氏伝』が全く触れない場合もあり、更には右には示していないが、『左氏伝』に記載された事柄に応ずる記事が経にはないという場合も数多く存している。

右表中、経と『左氏伝』の記載が明らかに相異している事例は1・7・9・10・11・18・21・22の八例であるが、まず1は、経の「王」が周王であることを明示した『左氏伝』の説明が加わったものと見なすことができる。7は、「衆父」について『会箋』は「公子益師」の字としているが、『左氏伝』が経の文をパラフレーズするの、人名についてその異称を用いることはしばしばあるようである(右表の21もその一例である)。従ってこのような事例は、経伝の齟齬などではなく、経の人名を異称で表現するという形で、『左氏伝』が伝として経文に説明を加えているものと見るのが妥当なところである。

9は、経にある月名の表記が『左氏伝』ないというものであるが、これは経の記載との重複を避けた『左氏伝』の省略と見なすべきものである。仮りにそうでなくとも、これを経伝の齟齬するだけの客観的根拠とすることはできないようである。

10は『左氏伝』が経文に説明を加えたものと見なすことができる。11は『左氏伝』の省略とみなせる。

18は日付が両者相異しているが、『左氏伝』はこれについて右の引用の直後に「赴ぐるに庚戌を以てす。故に之れを書す」と述べている。事実からすれば「壬戌」が正しいが、周はこれを「庚戌」と赴告した。そこで経はその赴告された日付に従って記したというのである。従って、これももとより小論が問題にしようとしている齟齬

ではない。

続いて、19も『左氏伝』の省略。21も（先に触れたように）『左氏伝』の説明。22も省略。

以上隠公元年から同三年までの八例の経伝の記載の不一致を見る限りは、いずれも『左氏伝』の経文に対する説明あるいは経文の省略その他の理由によつて説明が可能であり、『左氏伝』が現行『左氏経』の祖とは別の経を用いていたなどとする見方は成り立ち得ないようである。事情は右表以降の記載に於いても何ら変わることはないが、詳細に吟味を加えると、やはり『左氏伝』が別の経を用いたとすべき齟齬にぶつかるのである。

以下その例を示したいと思うが、そのためにまず経伝間の様々の不一致のうち、単純には右のような『左氏伝』の説明や省略と見なすことのできないものを列挙した後、それが確かに小論の求める経伝齟齬の例と見なすことができるか否かを吟味するという方法を用いたい。その場合、その例を羅列すれば、以下迂遠な考察が予想されるどころ、更に混乱を増すので、これを、年・季節・月・日の時に関する語、固有名詞、行動を示す語、及びその他の語句というように分類して、それぞれを章ごとに見ていくこととしたい。

二、時に関する語

まず時に関する語に見える経伝不一致の例から見ていく。

経文に記された事項のうち、年・季節・月・日等の時に関する記載は、人名・地名に異称があるのとは異なり、基本的に他に言い替えて説明の余地がない唯一のことからである。もし時の記載について不一致があり、そこに右の18の例のような、時の記載の不一致を

説明するような伝文がなければ、それは取りも直さず、『左氏伝』が見た経が現行のものではなかったことを示すと、一応考えられるところである。そこでこの例を具体的に見てみたいと思うが、その中で季節の不一致を示すものは三例であるが、これは後に見ることとし、先に月と日の記載の不一致を示しているものを見てみたい。管見によれば、その例として次の二四条を挙げることができるようである。ただし、月日の記載が経にはあつて伝にはないという場合、及びそれとは逆にそれが経にはないが、伝にはあるという場合は、すべて『左氏伝』の省略及び補足と見なしてここには取り挙げない。

	年	經	文	傳	文
1	隱10	春、王二月、公會齊侯鄭伯于中丘。	春、王正月、公會齊侯鄭伯于中丘。癸丑盟于鄆。		
2	同11	秋、七月、壬午、公及齊侯鄭伯入許。	秋、七月、公會齊侯鄭伯伐許、庚辰、傅于許。		
3	莊8	冬、十有一月、癸未、齊無知弑其君諸兒。	冬、十二月……（賊）遂殺之（齊侯）而立無知。		
4	僖10	正月……晉里克弑其君卓、及其大夫荀息。	（前年）十一月、里克殺公子卓于朝、荀息死之。		
5	僖15	十有一月壬戌、晉侯及秦伯戰于韓。	九月……壬戌、晉侯及秦伯戰于韓原。		
6	僖28	夏、四月、己巳、晉侯齊師宋師秦師及楚人戰于城濮。	四月、戊辰、晉侯宋公齊國歸父崔夭……次于城濮。		
7	文2	三月乙巳、及晉處父盟。	夏、四月、乙巳……書曰「及晉處父盟」以厭之。		
8	文3	夏、五月、王子虎卒。	夏、四月、王叔文公卒。		

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
昭17	昭13	昭12	同	昭8	襄27	襄25	襄19	襄12	襄9	襄6	成18	成10	成2
八月、晉荀吳帥師滅陸渾之戎。	夏、四月、楚公子比自晉歸于楚、弑其君虔于乾谿。	五月、葬鄭簡公。	冬、十月、壬午、楚師滅陳。	卒。夏、四月、辛丑、陳侯溺。	日有食之。冬、十有二月、乙亥朔、辰在申、司歷過也。再失閏。	秋、八月、己巳、諸侯同盟于重丘。	卒。秋、七月、辛卯、齊侯環。	夏、六月、庚辰、鄭伯論卒。	十有二月、己亥、同盟于戲。	十有二月、齊侯滅萊。	春、王正月、晉殺其大夫胥董。	五月、丙午、晉侯卒。	八月、庚寅、衛侯速卒。
九月、丁卯、晉荀吳帥師涉自棘津、庚午遂滅陸渾。	夏、五月、癸亥、王縊于芋尹申亥氏。	六月、葬鄭簡公。	冬、十一月、壬午、楚師滅陳。	夏、四月辛亥、(陳)哀公縊。	十一月、乙亥朔、日有食之。辰在申、司歷過也。再失閏。	秋、七月、己巳、諸侯同盟于重丘。	卒。夏、五月、壬申晦、齊靈公卒。	秋、七月、庚辰、鄭伯論卒。	十一月、己亥、同盟于戲。	十一月、齊侯滅萊。	(前年)冬、閏月乙卯晦、欒書中行假殺胥董。	六月、丙午、晉侯如廁、陷而卒。	九月、衛穆公卒。

24	昭22	冬、十月、王子猛卒。	十一月、乙酉、王子猛卒
昭26	十月、天王入于成周。	十一月、癸酉、王入于成周。	

以上二四条が、管見によって確認された月日不一致の例であるが、2・6・18が日付のみの相異である。(この中で2は、経の魯公等の「入許」に対応する伝の語が「伐許」であるのか、「傳于許」であるのか、明確でないところであるが、いずれにせよ、「壬午」の日と「庚辰」の日では五八日の隔たりがあり、同一月内にありえないから、これが日付の不一致であることは間違いない。)その他はすべて月名の相異であるが(この中の、日付が経伝いずれか一方のみに存するという形で的一致は伝の補足ないし省略とみなす。)その中で、4・11は月名の異同に伴って、年と季節も相異し、12・15は同様にして、季節の記載も相異している。

このような時の記載は、他に言い換えることのできない唯一の事柄であるから、これらの不一致こそ、伝の作者が、現行経以外のものを見ていたことを物語る好個の例と考えられるが、これについては、なお次に見る問題を吟味する必要がある。

ここで17に注目してみよう。経の一二月一日、乙亥の日の日食を『左氏伝』は「司曆」の閏月の置き方の誤りによる誤記として、これを「十一月」と改め記している。「再失閏」というのは閏月を二つ置き忘れているということらしい。『左氏伝』はこのように春秋時代の暦を推算して、それによって経の時の記載を批判し自らの推算値をもって伝に記しているのであるが、この例より推せば、15の例以外にも、『左氏伝』が、この種の補正の結果を伝文に記し、その結

果右のような月名に関する経伝の不一致が生じている可能性を想定しなければならないこととなる。

事実、右の例はその多くが前後にひと月の誤差を示すものであり、これらは閏月をどこに置くかに関わる誤差とみられ、いずれも、『左氏伝』が本来他の経を見ていたことを示すような例とはしがたいようである^③。筆者は暦字に通ぜず、『左氏伝』がどのような暦学的推算を用いているかを明らかにしないので、ここにおいて、右の例の吟味をあきらめるべきようであるが、しかし、右の二一条の中になおこの原因による不一致とは見なせないものが二・三存しているようである。

右の二四例中、4・5及び15の例をみると、ここでは経伝の誤差が、ふた月となっているが、15ではまた日付の記載も相異している。このふた月の誤差については、置閏法に基づいて『左氏伝』が補正をなした跡と見るのは困難のようである。先に見たように17で『左氏伝』は「再失閏」と言い、哀公一二年に、経の「冬、十有二月、蝻。」に対する伝文に孔子の「司歴の過ちなり」という言葉が引かれ、しかもこれが九月の記事の直前で記述されている。これらのことから考えて、『左氏伝』は経の月の記述にふた月以上の誤りの可能性も想定しているわけである。従って、右の二月の誤差の例もやはり伝の補正の跡とすべきようであるが、しかし、必ずしもそうとばかりは言えないようである。

ここで4の例をやや詳しく見てみよう。僖公九年の経には「九月・甲子、晉侯僖諸卒」とあって、これについて伝は「九月晉獻公卒。」と記し、不一致はない。もし、『左氏伝』が僖公一〇年正月の晋の里克の弑君を、暦の推算によって前年十一月に改めたと

すれば、『晉侯僖諸』が死んだ九月から里克の弑君までの間に、『春秋』の暦に閏月が二つ置かれていることを『左氏伝』が前提し、しかもその二つの閏月を『左氏伝』がいずれも誤りとしてこれを省いたことになる。もしそうであれば、暦学上のゆゆしき大過であり、先の17の例のように『左氏伝』はこれを強く批判する言葉があるはずである。要するに、これは、外でもない『左氏伝』が見た経の僖公十年正月のところに「晉里克弑其君卓、及其大夫荀息。」の一文がなかったであろう。

次に5を見てみよう。この年の経文の九月の記事に、「己卯晦、震夷伯之廟」とある。そして『左氏伝』はこの記事については九月の所で伝を施している。「己卯」から「壬戌」までが四三日、「壬戌」から「己卯」までが一七日それぞれ隔たっているから、九月晦に「己卯」があるなら、九月にも十一月にも「壬戌」の日は来る。もし右の5の経の「十有一月壬戌」が『左氏伝』の暦学的補正によって、九月壬戌と改められたのであれば、一方の「九月己卯晦」もそれに伴って、七月に改めなければならないまい。このことから考えて、右5の韓の戦いは『左氏伝』が見た経には、『左氏伝』の記載と同様、九月の項に書かれていたと見なければならぬようである。

次に15については、月名のみならず、日付も相異している。日付は、他に言い替えることのできない唯一のものである。従って、これは明らかに現行の経の祖以外の伝承に従ったものである。そして、『左氏伝』が現行の経の祖を見ているとすれば、『左氏伝』はこの齟齬について何らかの説明を加えて然るべきである。しかるにそれがない。とすれば、これらは、『左氏伝』が本来現行の経以外のものを経としていたことの好個の例とすることができよう。また、

2・6・18の日付の相異を示す例の経文も、これと同様の理由により、『左氏伝』の見ざる経文とすることができよう。

ただ、このように結論するには、今一つ吟味すべき事柄がある。

前章で見たように、『左氏伝』は、隠公三年の周の平王の崩の所で、この崩に関する『春秋』の記載が、実際の日付ではなく、周から魯へ赴告された日付をもつて書かれたものとしていた。ここの『左氏伝』の経伝齟齬の説明が、他のすべての魯以外の国の記事に通用するものという前提が『左氏伝』にあり、従って、右の四例の齟齬について『左氏伝』が何も説明しない、ということも考えられる。^④ところで、次の二つの文は、国家間の赴告に関する『左氏伝』の凡例である。

凡そ諸侯同盟すれば、是に於いて名を称す。故に薨すれば、則ち赴ぐるに名を以てす。終はりを告げ嗣を称して以て好を継ぎ、民を息はする、之れを礼経と謂ふ。(隠公七年)

凡そ崩薨赴げざれば、則ち書せず。禍福も告げざれば、亦書せず。不敬を懲らすなり。(文公十四年)

『左氏伝』の凡例中、赴告に触れたものは右の二例と見られるが、いずれにおいても、『春秋』の魯外の記載が、事実ではなく、赴告の内容に従うというようなことはこの凡例中には述べられていない。ところで、『左氏伝』には先の隠公三年の例のように、実際に事の起こった日付ではなく、赴告された日付で書かれたことを説明するところがある。僖公一十七年の経に「冬、十有二月、乙亥、齊侯小白卒」とあるのに対し、『左氏伝』はこれを同年の「十月、乙亥」とした上で、この相異を「十二月、乙亥、赴」と説明し、また、襄公二十八年経の「十有二月、甲寅、天王崩」について、『左氏伝』は

これを同年「十一月、癸巳」の出来事と記した上で、十二月に周からの赴告があり、その崩日を問うと、「甲寅」と答えたので、経にはこの赴告の通りに記されたとしている。

このように経の記載と自らの史料との月名や日付の不一致を説明するのに、『左氏伝』が赴告の問題を以てする例が都合三例見えているが、これを凡例として掲げることもなく、少数ながらもこのように個別に同様の説明を繰り返し『左氏伝』が述べているのであるから、『左氏伝』が日付に関する経伝不一致がすべて、初出の隠公三年の例のように赴告の問題として読まれることを前提としているわけではないと言える。このことから、先ほど見た2・4・5・6・15・18の、月名がふた月の誤差を示す例や日付の記載が経伝の間で不一致を示している例は、いずれも『左氏伝』が現行の経を見えないことを示すものであると結論づけることができると考える。

なお、先に述べておいたように、時に関するもののうち、なお季節の記載の不一致の例が三つある。次に示す。

25	隠6	冬、宋人取長葛。	秋、宋人取長葛。
26	桓7	夏、穀伯綏來朝。	春、穀伯綏來朝。
27	哀4	夏、蔡殺其大夫公孫姓公孫霍。	春、……逐公孫辰而殺公孫姓・公孫霍。

これらの季節の不一致についても『左氏伝』は何ら言うところがない。経に月も日も書かれず、『左氏伝』自らもこれらの事柄の発生した月日に関する伝承を持たない。従って、これを『左氏伝』の暦の推算による補正と考えることはもとよりできない。また、ここに経の記載が赴告に従ったとする見方が『左氏伝』にあったとすれば、

その時は、先に見たように、『左氏伝』が説明するはずである。従ってこれらも先の六例に加えて差し支えなからう。

さて、以上を要するに、右に掲げた都合二七条のうち、2・4・5・6・15・18・25・26・27は『左氏伝』が現行のとは違う経本を用いていたことを示す経伝齟齬の例と見ることができると考える。

なお、本章都合二七条中、3では、経が齊侯の弑殺者を「無知」としているのに対して、伝はこれを「盗」とし、4では、経の「其君卓」が伝では「公子卓」となり、これに伴って経の「弑」が伝で「殺」となり、6では、経の「戰于城濮」が「次于城濮」となり、21では経が弑君として記述しているのに対し、伝では自殺として記述している。更に、27では経の「公孫霍」を伝は「公孫盱」に作っている。これらの不一致については次章以下で再度見ることとする。

三、固有名詞

経文中の固有名詞について、『左氏伝』がしばしばその異称を用いることは先に見たとおりである。従って、これに関する経伝の不一致が、実は齟齬であつたとしても、それを証することはほとんど困難である。しかし、次の例に関しては、吟味の余地がありそうである。

	年	経	文	伝	文
1	隠8	春、宋公衛侯遇于垂。		「垂」作「犬丘」	
2	隠11	夏、公會鄭伯于時來。		「時來」作「邲」	
3	桓12	秋、七月、丁亥、公會宋公燕人盟于穀丘。		「穀丘」作「句瀆之丘」	

4	僖6	夏、公會齊侯宋公陳侯衛侯曹伯伐鄭、圍新城。	「新城」作「新密」
5	僖15	十有一月壬戌、晉侯及秦伯戰于韓。	「韓」作「韓原」
6	成2	己酉、及國佐盟于袁婁。	「袁婁」作「爰婁」
7	襄19	春、王正月、諸侯盟于祝柯。	「祝柯」作「督揚」
8	昭12	春、齊高偃帥師納北燕伯于陽。	「陽」作「唐」
9	同右	楚殺其大夫成熊。	書曰「楚殺其大夫成虎」
10	昭18	冬、許遷于白羽。	冬、楚子使王勝遷許於析、夷伯羽。
11	昭30	徐子章羽奔楚。	「章羽」作「章禹」
12	定3	冬、仲孫何忌及邾子盟于拔。	「拔」作「邲」
13	定7	齊侯衛侯盟于沙。	「沙」作「瑣」
14	定10	夏、公會齊侯于夾谷。	齊侯會祝其、實夾谷。
15	定14	公會齊侯衛侯于牽。	「牽」作「脾上梁之間」
16	定15	齊侯衛侯次于渠除。	「渠除」作「蕞」
17	哀4	夏、蔡殺其大夫公孫姓公孫霍。	「霍」作「盱」
18	哀16	二月、衛子還成出奔宋。	「還」作「臯」

凡そ以上の一八条、9・11・17・18が人名、他は皆地名である。なお、この中で17は、前章に取り上げた27と同文である。

さて、まずこの中の人名の不一致四例から吟味してみよう。先に

述べたように経の人名を『左氏伝』はその異称をもつて記すことは、しばしばあるが、この四例については、異称ということでは片づけられない。まず、9では、経の「成熊」を伝が「成虎」に作っているが、これは伝の「書曰『楚殺其大夫成虎』、懷寵」という文内に見えるものである。この『左氏伝』の「書曰」は、経文を直接引用するときに発せられる語である。そこに引用される語句は、経文と同一でなければならぬ。従つて、この例も『左氏伝』の見た経が現行の経の祖ではなかったことを示す齟齬と見ることができよう。

続いて、11・17及び18は、伝が経の人名の異称を用いているのではなく、『羽』^⑤に対して「禹」、「霍」に対して「盱」、「還」に対して「瞞」と、同音の異字によつて表記されたものを用いていると見られる。ところで、公・穀・左氏の各経を相互に比較してみると、このような普通異字による語句の不一致ということはかなりの数に上る。例えば、経、隠公元年、左氏及び穀梁経に「三月、公及邾儀父盟于蔑」とあるのを、公羊経は「三月、公及邾婁儀父盟于昧」に作る。「邾」―「邾婁」は、清の趙坦によれば、方言音による異同と見られ、「蔑」―「昧」は普通異字と見られる。また、同二年、左氏経・公羊経の「無駭帥師入極」を穀梁経は「無駭帥師入極」に作る。「駭」―「倅」は普通異字と見られる。^⑥このように、三伝の経の間にはしばしば普通の異字の使用による字句の不一致が見られる。このことから考えて、右の「霍」―「盱」と「還」―「瞞」の経伝の異同も、『左氏伝』が見た経本が、公羊経や穀梁経のような、現行の経本の系統とは異なる別の本であり、その経本と伝の間ではこの部分は一致していたという事情を示していることと見ることができらう。

次に地名不一致の例であるが、6の「袁」―「爰」、13の「沙」

―「瑱」、16の「渠蔭」―「蘧挈」などは、いずれも普通の字と見られる。また2の「時來」―「邾」も音韻上の原因に因る転字のようである。これらも右と同様の事情を示す例と見なすことができると考えられる。

その他の例はどのように考えられるか。これを見るために、10の昭公一八年の例に注目してみよう。ここでの伝の言わんとするところは、許国が遷った「析」の地は、経に所謂「伯羽」であるというものである。とすれば、『左氏伝』が見た経は、現行経の「白羽」ではなく、「伯羽」に作っていたことになり、これも右に見た例に含めることができる。

ところで、この場合、「析」は「白羽」乃至「伯羽」の異称ということになるが、そうすると、『左氏伝』の地名の記載は、地名においても経に記載されたものの異称を用いる場合があるということになり、右の一八例中、今見た9及び普通異字の例7以外は、すべて『左氏伝』が経の異称を用いた結果として起こった不一致と見るべき可能性を持つこととなる。ところが、他方、14においても『左氏伝』は自らの記載と経の記載との不一致について10と同様の説明を加えている。では、残る1・3・4・5・7・8・12・15においては、10や14のような説明をなしていないであろうか。つまるところ、やはり『左氏伝』の見た経との間には、これらの齟齬はなかったと見て差し支えあるまい。ただし、15の「牽」―「脾上梁之間」については、『左氏伝』の説明とも取られるので、これは除外しておく必要があるであろう。

以上を要するに、本章前掲一八条のうち、10・14・15を除く他の一五条は、小論の求める齟齬の例と見ることができると考える。

四、行動に関する語句

続いて、人物等の行動に関する語句が、経伝間で不一致を示している場合について見てみよう。今、この例を列挙する。

年	経	文
1 桓15	冬、十有一月、公會宋公、衛侯陳侯于袤伐鄭。	冬、會于袤、謀伐鄭、將納厲公。
2 莊8	冬、十有一月癸未、齊無知弑其君諸兒。	冬、十二月：（賊）遂殺之（齊侯）而立無知。
3 僖10	正月……晉里克弑其君卓、及其大夫荀息。	十一月、里克殺公子卓于朝、荀息死之。
4 僖15	十有一月壬戌、晉侯及秦伯戰于韓。	九月、：壬戌、晉侯及秦伯戰于韓原。
5 昭13	夏、四月、楚公子比自晉歸于楚、弑其君虔于乾谿。	夏、五月、癸亥、王綏于芋尹申亥氏。
6 昭25	十有二月齊侯取鄆。	「取」作「圍」
7 定4	三月、公會劉子晉侯宋公蔡侯衛侯陳子鄭伯許男曹伯邾子莒子頓子胡子滕子薛伯杞伯小邾子齊國夏于召陵侵楚。	春、三月、劉文公合諸侯于召陵、謀伐楚。
8 哀10	三月戊戌、齊侯陽生卒。	齊人弑悼公。

以上8条のうち、2・3・4・5は、小論第二章の「時に関する語」の不一致の例としてすでに掲げたものであり、そのうち3・4は小論の捜す経伝齟齬の例とみなしたものである。

まず、1を見てみると、伝文は「冬、袤に會して、鄭を伐を謀る

は、將に厲公を納れんするなり」と読むか、「冬、袤に會するは、鄭を伐つを謀るなり、將に厲公を納れんとす」と読むかのいずれかであろうが、いずれにせよ、鄭を「伐」つたと明言する経と「謀伐」とする伝の記載とは一致しない。経にはこの翌年夏にも「伐鄭」とことが書かれており、これについては伝も同様に記述しているが、前年の一五年の方には鄭を伐つた事実が記さず、しかも、これについての説明もない。これは『左氏伝』が見た経に「伐鄭」の二字がなかったか、「伐鄭」が「謀伐鄭」となっていたことを示していると考えられる。

続いて2では、経が、無知が齊君を「弑」したと明言するのに対し、伝は賊が「殺」したことになっている。『左氏伝』がこの経文を見ているとすれば、経と矛盾を説明すべきであろう。ただし、阮元の校勘記によれば、経の「弑」を「殺」に作る本もある。しかし、齊侯の弑殺の主体が経伝矛盾していることに変わりはない。

3は、晋の里克が「其君卓」を「弑」したとするのに対し、伝は「公子卓」を「殺」したとしている。これは、伝が「卓」の死を経の記載の前年と見ており、しかも、その年に前晉侯が死んでいるから、「卓」はなお即位していないと『左氏伝』が見た事情によるだろう。しかし、『左氏伝』がこの経文を見ているとすれば、この矛盾の説明があつて然るべきである。

4は、韓に「戦」と明言されているのに伝は「次」としている。この辺りの『左氏伝』の記載を見ると、やはり晋と秦との戦を記述しているが、ただし、この例は前の二章で見たように月名と地名が齟齬していることから考えて、『左氏伝』の見た経では、この経文の「戦」が「次」となっていたと考えられる。

5は、楚の君度の死について、経が公子比の「弑」とするのに対し、伝は自ら「縊」死したとしている。これについても『左氏伝』の説明があつて然るべきである。

6は、経の「取」と伝の「圍」の相異であるが、これは伝の経に対する説明ともとれるが、伝にはこれに続けて翌昭公二十六年の記事として、『齊侯取鄆』の一文が見えている。従つてこれも経伝の齟齬ということが出来る。

7は、経に「侵楚」と明言しているが、これに対応する伝の文では、右のように「謀伐楚」となり、その後の伝文を見ても、ついにこの諸侯の連合が楚を伐つ記述は見出せない。よつてこれも経伝の不一致に数えることができる。

8は、齊侯陽生の死についての記述の仕方が経伝で異なっており、これについての伝の説明はない。

以上の考察により、前掲八例はすべて小論の捜す経伝齟齬の例と見なすことができると考える。なお、先に述べたように右のうち、2・3・4・5は第二章でも見たものであるが、一文の二要素で齟齬が指摘できるということは、これを以て『左氏伝』の見ざる経文の例とする小論の見方の妥当性を確認させるだろう。

五、その他の語句

前章までに見てきた時に関する語、固有名詞、行動に関する語句の外、更に次のような経伝の不一致を示すことができる。

1	年	経文	伝文
隠9	三月、癸酉、大雨震電。	三月、癸酉、大雨霖以震。	……凡雨自三日以往爲霖。

2	莊6	冬、齊人來歸衛俘。	「衛俘」作「衛寶」
3	僖5	春、晉侯殺其世子申生。	「世子」作「太子」
4	昭26	夏、公圍成。	「公」作「齊師」
5	哀11	衛世叔齊出奔宋。	「世叔」作「大叔」

以上五例。5は固有名詞で第三章で扱うべきであるが、3と併せ見る必要があるのでここに置いた。

さて、1において伝は、経文の「大雨震電」を「大雨霖以震」とパラフレーズし、更に三日以上雨が降り続くことを「霖」というと説明している。このような「凡」で始まる字句の定義は、経の全体の用字について述べる言い方である。しかるに、経にはこの字は見えていない。つまり『左氏伝』は経にない字の説明をしていることになる。これは、『左氏伝』が見た経では「大雨霖電」とあったのを、「大雨霖以震」と承け、更に経の「霖」の字義を説明しているのみれば矛盾がないところである。2については、「俘」と「寶」では字義が全く違うが、『公穀』両伝の経も『左氏伝』同様に「俘」を「寶」に作っている。このことから考えて、『左氏伝』の見た経も、「寶」に作っていたと見ることが出来る。3では、経の「世子」の「世」を伝が「大」に作っているが、ここに引いたのは一例であり、現行『左氏経』中に「世子」は都合二七箇所に見え、そのうち伝が記載を簡略化して直接経文に触れず、それによつて経の「世子」に対応する語が伝に出ないという場合が一一例。他は一つの例外を除いて、すべて「太子」に作っている。経の中に「世」の字は、「世子」の外に「世叔」の語で三箇所に見えるが、そのうち二例については伝の省略の中にあり、直接触れているのが、前掲5である。つまり、伝

は経の「世」の字を、一例を除いてすべて「大」に改めた形になっているのである。しかも、襄公五年では、経の「叔孫豹・鄆世子巫如晉」について「書曰『叔孫豹・鄆大子巫如晉』」と、直接引用の中でやはり「大子」としている。このことから見て、『左氏伝』が見た経は「世子」・「世叔」をすべて「大子」「大叔」に作っていたのではないかと考えられるところである。ところが、昭公八年の「春、陳侯之弟招殺陳世子偃師」の経に対する「書曰」の中では、経文と同様「世子」に作っている。これが経の「世子」にそのまま応ずる『左氏伝』の唯一の例であるが、これは、あるいは、この昭公八年の伝文について後世の手が加わったのではないかと考えられる。しかし、同時に右の襄公五年の伝の「大子」も後世の手が加わったことも考えられるわけで、当面これらの例は、小論の捜す経伝齟齬の例に数えないことしておく。

さて、続いて4であるが、ここでは「圍成」の主体が全く異なっており、明らかに記述が矛盾している。なお、この辺りの伝の記載によれば、この斉の行動は、斉に亡命した魯公を復帰させるために魯の邑である「成」を「圍」んだというものであり、魯公が関連する事柄ではあるが、魯公がこの戦いに参画した様子はない。

残る5については、3と同様の事情により、これを除外しよう。以上の吟味より、前掲五条のうち、1・2・4に明確な経伝の齟齬が認められるが、『左氏伝』はそれについて何も語っていない。よってこれらを『左氏伝』の見ざる経文と見なすことができると考える。

六、結 び

以上現行『左氏経』の文とそれに応ずる『左氏伝』の文の種々の

不一致の中で、『左氏伝』が現行の経本の祖を見ているとすれば、起り得ないと考えられるものを吟味、指摘した。以上に掲げた外にも、のように疑われるものはなお存する。例えば、

莊公二八年

〔経〕冬、築鄆。大無麥禾。臧孫辰告糴于齊。

〔伝〕冬、飢。臧孫辰告糴于齊、禮也。築鄆、非都也。

僖公一九年

〔経〕秋、宋人圍曹。衛人伐邢。

〔伝〕秋、衛人伐邢、以報蒐圃之役也。……宋人圍曹、討不服也

これらの例においては、伝の記述の順序が経に対して前後している。このように記述の順序が経伝で異なっている例は、管見によれば、この二例の外になお十数箇所に見出すことができるが、『左氏伝』の記述の順序は、現行の経と系統の異なる経本の記述が反映しているものと見られ、従ってこれらも小論の捜す齟齬の例とすることができる。しかし、もはや小論の目的は、前章までの字句の異同の吟味によつてすでに尽くされていると思われるので、これ以上に煩瑣な作業を行うことは省略する。

ところで、右に見てきたような経伝の齟齬は、後世の伝承の間に生じた可能性も当然考えなければならず、その齟齬が『左氏伝』が現行経本の祖を見ていれば生じ得ないことを示すのみでは、必ずしも『左氏伝』がこれを見ていないことの根拠とすることはできない。しかし、右に見てきたような経伝の記載の不一致は、『左氏伝』が経文に触れつつ、その意義を解説ないし解釈を施す所に存するものである。ここにおいては、経の各文の全部あるいは一部がそのままの形でもう一度現れなければならない。そこで、一方の文に誤記その

他の誤伝が生ずれば、それに従って他方の記載も書き換えられるか、もしくは、他方の記載によって修正されるという方向へと進み、結局は両者の不一致はやがて解消するだろう。現に、阮元の校勘記を見ても、二・五章に掲げた例に関する限り、経伝いずれにおいても、これまでの検討結果を否定する異伝は一例も見えない。経伝不一致の字句が存するということは、むしろ伝承が極めて正確であることを物語っていると言うことができるだろう。可能性としては後世に生じた誤伝による齟齬も考えなければならないが、以上に見てきた二章九例、三章一五（二章と重複一）例、四章八例（二章と重複四）、五章三例、都台三二条（重複を除く）がすべてにわたってそのようなものとは考えられないところである。

では、『左氏伝』が経としていたもの現行の経ではないとして、現行の経が『左氏伝』の経となったのは何時どのような事情によるのか。これは、前漢末劉歆が宮中の秘書中に「古文春秋」を発見しこれを『左氏伝』の経としたことによると考えられる。これについては冒頭に述べたように別稿で詳細に論じている。それでは『左氏伝』が見た元の経はどうなったのか。これについては、現在のところ何も考えるところがない。しかし、現行の『左氏経』が『左氏伝』本来の経本の系統ではないことは右の考察によって明らかにしえたと考える。

注

① 『町田三郎教授退官記念中国思想論叢』（九五年三月刊行予定）所収

② 新城新蔵氏「春秋長曆」（『東洋天文学史研究』所収）による。

なおまた同氏によれば、この日食は『左氏伝』のいうように十一月乙亥とするのが正しい。ただし、これは経文に生じた誤伝であって、閏月の置き方が誤っているというのは、『左氏伝』の推算の失敗であり、実際には正しく閏月が置かれているという。

③ 経と伝とひと月の誤差あるという時、例えば本文の表の1のうに両者日付が付していない場合、ここに『左氏伝』の曆の計算による補正があるとすれば、それは置閏に関わる補正以外に考えられないところである。他方『左氏伝』には、経の置閏法を批判する文が、本文で引いた襄公二十七年以外に、後に引く哀公一二年、及び、文公元年（「春……於是閏三月、非礼也」）の都合三回見えている。これら三つの置閏批判は、『左氏伝』が自ら推算と合わない月名の記載を経に見出したその度ごとに行っている感がある。

従って、この置閏批判がない月名のみひと月誤差があるという例も、小論の提示しようとする経伝齟齬の例とみなして差し支えないと考えるが、ここでは慎重な態度を取っておく。

④ 杜預が経伝のこの種の齟齬を説明する際には、おおむねこの立場に立つ。例えば、18の昭公六年の例の伝に注して杜預は「経に辛丑と書するは、赴に従ふなり」と述べているごとくである。

⑤ 阮元の校勘記によれば、11の経の「羽」の字を伝と同じ「禹」に作るものが一本ある。これは阮元が言うように伝文の記載に従って誤ったものとみて差し支えあるまい。

⑥ 趙坦『春秋異文箋』（皇清経解卷二三〇三所収）参照。

⑦ 小論二・三章に掲げた引用のうち、阮元の校勘記が異伝を指摘しているものは次の通りである。

二章、3、経「弑」―「殺」 17、経「乙亥」―「乙卯」

三章、11、経「章羽」―「章禹」 12、経「拔」―「枝」

17、伝「肝」―「吁」

四章、1、経「袞」―「袞」 2、経「弑」―「殺」

五章、1、伝「以往」―「以上」

この中で、経伝の齟齬の例とするのに支障を与える可能性のあるものは、二章の3と三章の11であるが、前者は、本文でも述べたように、これとは同文の別の箇所においても齟齬が指摘できる。三章の11は、注⑤で述べている通りの理由で、いずれも小論の結論に影響を与えるものではない。

(本学助教授)